

施設ショウガに 新たに発生した褐色しみ病(仮称)



写真1 褐色しみ病が発生した新ショウガ (左: 重症、右: 軽症)

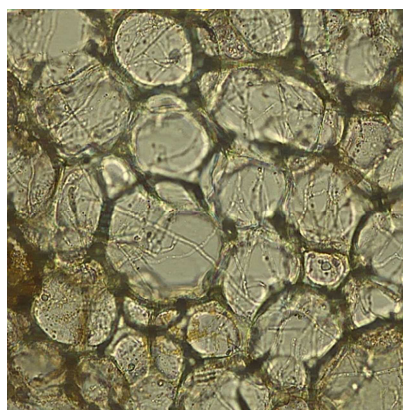


写真2 植物体内の菌糸

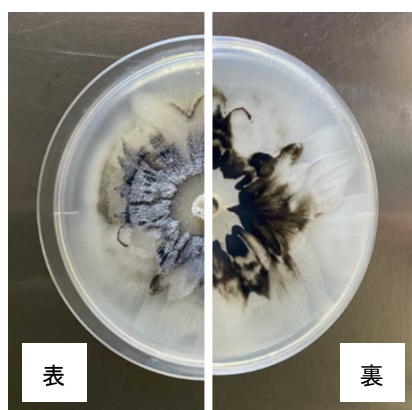


写真3 培地上の菌の様子



写真4 断面の様子

高知県内では以前から、施設ショウガの根茎表面が褐変する障害が発生していました(写真1)。原因究明のため、障害部からの菌の分離や、分離菌の形態観察などを行ったところ(写真2、3)、*Plectosphaerella* 属に近縁の糸状菌(カビ)によって引き起こされる病害であることが明らかとなり、病名としてショウガ褐色しみ病を提案しました。

褐色しみ病が発生すると、ショウガの根茎表面に褐色の斑点が形成され、品質低下の要因となります。施設ショウガの生育中～後期から発生し始め、収穫時に褐変に気づきます。収穫後も障害部が赤や黒色に変

わることはなく、症状は根茎内部に進行しません(写真4)。

本病の伝染経路として、種イモとして使用した根茎が伝染源となる可能性や、病原菌が土壌中に残り、病気を引き起こしている可能性が考えられます。

本病に対する登録農薬はなく、現在ショウガに登録を有する農薬を対象として、効果の確認と農薬登録促進に取り組んでいます。なお、本障害は露地ショウガにも発生して品質低下の原因となっている可能性があるため、今後も継続して調査を行っていきます。

(病理担当 林一沙 088-863-4915)